

司馬遼太郎の日露戦争観

——『坂の上の雲』における戦争観の変化と徳富蘆花のトルストイ観

高 橋 誠一郎

日露戦争開戦 100 周年を迎えた今日、再び『坂の上の雲』を「明治国家」や「戦争」を賛美した小説として捉えようとする論調の特集が増えてきている。たしかに司馬遼太郎は『坂の上の雲』の前半で「ロシアは日本を意識的に死へ追い詰めていた」とし、この戦争をアジアで初めて「憲法」も持った「文明」的な「明治国家」と、皇帝の専制国家である「野蛮なロシア帝国」との戦いと位置づけていた。

しかし、司馬がその全作品を読んだだけでなく、「少年のころの私は子規と蘆花によって明治を遠望した」と記した徳富蘆花は、伝記『トルストイ』においてトルストイを高く評価しつつもトルストイの反戦論には与しなかったが、戦後には「一步を誤らば、爾（なんじ）が戦勝は即ち亡国の始とならん、而して世界未曾有の人種的大戦乱の原とならん」と近代戦争の危険性に注意を喚起するようになった。

司馬も日露戦争における要塞旅順の攻防とクリミア戦争におけるロシアの要塞セヴァストポリの攻防を比較する中で、トルストイが小説『セヴァストポリ』において、「愛国と英雄的行動についての感動をあふれさせつつも」、「殺戮だけに価値を置く」戦争に対しては、「痛酷なまでののろいの声をあげている」ことに注意を向けた。そして、日露戦争が終わった後で徳富蘆花がトルストイを訪ねていることにふれた司馬は、終章「雨の坂」においてはバルチック艦隊をうち破った参謀の秋山真之が、「人類や国家の本質を考えたり、生死についての宗教的命題」を考え続けるようになったとし、「蘆花の憂鬱が真之を襲うのもこの時期である」と書いた。

こうして、この長編小説を書き終えた後で司馬は、世界史のなかで「帝政末期のロシアとそっくりの愚鈍さを示した」のが、「太平洋戦争をやった日本である」と記して、西欧列強に対抗するために急速に近代化を進めた日露両国の類似性と「欧化と国粋」の問題を鋭く指摘するようになるのである。

cf. 高橋誠一郎「司馬遼太郎の徳富蘆花と蘇峰観——『坂の上の雲』と日露戦争をめぐって」『COMPARATIO』8（九州大学比較文化研究会、2004）。

（たかはし せいいちろう、東海大学）

身体をつくる言葉——トルスタヤ的小説空間を「聞く」ということ——

高 柳 聡 子

タチヤナ・トルスタヤの長編小説『クイシ Кысь』（2000）の作品分析を通して、この作家の創作に特徴的な身体性の機能について検討する。

トルスタヤの作品では、視覚的なものよりも聴覚的なもの＝音の役割が優越している。それは、主人公の視覚性が脆弱であり、「見る」という行為がネガティブなものとして描かれること、さらに、「見る」ことを意味する動詞の使用される場面が限定されていることに支えられている。また、モノを映し出す媒体であるはずの鏡や水といったモチーフが本来の機能を果たさないことも視覚の不在を助長していく。こうした「見る」ことの負の機能に替わって「聞く」行為が先行している。小説の空間は、主人公が何かを「聞く」ことで立ち現れ輪郭を明確にしていく。視覚が見る対象としての他者を生み出し空間を広げていくのに対し、聴覚は「聞く」主体である主人公を空間の中心とし、描かれる空間を極めて閉鎖的で他者を排したものとす

る。こうした視覚の否定は「突然変異」というテーマに凝縮されている。登場人物の身体に課せられた変異は、極めて換喩的で全体像をとらえることを許さない。

この主人公の盲目性の機能とは何か、なぜ彼は「見る」ことができないのか。それは彼が「読者」だからだ。彼は筆耕であり、本来ならば「書く」と「読む」ことの境界線上にいるはずだが、ここでは限りなく「読む」筆耕として描かれている。読書に没頭する彼の姿は私たち読者のそれと重なっていく。主人公が読者だということは、プロットとの関係においても確認することができる。彼は主人公でありながら、プロットに絶対的には関与しない。物語の舞台である都市国家が消滅するときも生き延びてしまう。また、一人だけ身体に突然変異を被っていないことも、物語の外存在であることを裏付けている。

小説空間の中で主人公の視覚が常に否定され、それによって聴覚の役割が際立つことで、音が先行する世界が展開されていく。それは、そもそも私たちがテキストを「読む」行為に伴う時間的なズレを表象するものである。『クイシ』の小説空間とは「見る」ことの「聞く」ことへの遅延、誤読や言い間違いによる言葉のズレ、視覚性の欠如による身体のズレが居合わせるトポスであり「突然変異」とはそうしたズレの表象なのだと言える。

（たかやなぎ さとこ、早稲田大学大学院）